

大学院医歯学総合研究科医歯学系専攻
口腔機能再構築学講座 顎口腔外科学分野 教授
原田浩之



100%の治療など無理かもしれない。
でも、救えない人を0にするまで諦めない

田浩之教授。長年、口腔外科医としてやってきた中で、最近の患者に顕著な変化を感じている。「明確なデータがあるわけではありませんが、最近の若い人たちは顎の成長が進んでいない印象です。そのため親知らずが横向きに生えていたり、奥に伸びてきたりする。しかも、口を大きく開けることができないので、親知らずの治療などは難しくなっています」

大学院医歯学総合研究科医歯学系専攻
口腔機能再構築学講座 顎口腔外科学分野

原田浩之 教授

はらだ・ひろゆき

1991年北海道大学歯学部卒業。同大学歯学部附属病院口腔外科、千葉県がんセンター頭頸科を経て、2001年より東京医科歯科大学歯学部附属病院に勤務。2015年より現職。日本口腔外科学会認定口腔外科専門医・指導医、日本口腔腫瘍学会暫定口腔がん指導医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医。専門は口腔がん外科治療。がんの転移・浸潤のメカニズムに関する研究も行う。

原田教授は、歯学生時代に触れた口腔外科に興味を抱いてここまでやってきた。「若い頃は様々な手術を経験してみたくて、自分自身とても貪欲だったと思います。しかし、当時は若い医局員がたくさんいて、手術をするにも順番待ち。一人前になるのに何年もかかりました。そんな時代でしたが、



恩師に恵まれ、チャンスももらえたこともあって、卒業5年目に口腔がんを専門にやっていたと決めたのです」

口腔がんの専門医として、特に大切にしているのは口腔機能をできるだけ残すことだ。

「口腔がんの治療は、がんを切除して治すことが前提ですが、手術によって口腔機能が失われてしまうこともあります。話すことや食べることはQOL（生活の質）に関わることでですから、それらの機能を温存することを重視して治療を進めますし、術後の機能チェックやリハビリにも力を入れています」

患者さんの死を経験して一人でも多く救うと決意

そのような原田教授だが、一度だけこの仕事を辞めようと思ったことがあるという。

「がん治療を始めて間もない頃、再発と多発を繰り返して何

歯 学部附属病院の顎口腔外科は、口腔がんから口腔粘膜疾患、親知らずの抜歯、顎骨再建まで、手術を伴う様々な治療を行う。中でも口腔がん治療ではトップレベルの実績を持ち、年間240人の口腔がん治療を行う。

この科を率いるのは、口腔がん治療に携わって20年以上の原

高齢化に伴って増える口腔がん。日本では毎年8500人以上が罹患するという。そんな中、口腔がん手術を専門に奮闘するのが顎口腔外科の原田浩之教授だ。



大学1年生時のサッカー部の写真。

度も治療をしていた50歳くらいの男性がいました。結局その患者さんは治療の甲斐なく亡くなってしまった。それからしばらくは、いつも『こうしていれば治せたのではないか』と考えていました。大病院を辞めて開業医になろうと思ったこともありました。でも、100%の治療などあり得ないとしても、どうしても諦めたくないのです」

そのときの思いは変わらず、一人でも多くの患者さんを救うため、口腔外科の運営に力を注いでいる。次世代を担う人材にも期待を寄せる。

「口腔外科の世界では、抜歯方法や手術器具も100年くらい変わっていません。しかし、改善すべき診断法や治療法はまだあります。若い医師たちには、大きな夢を持って知識と技術を身に付け、新しい技術で世の中を変えてほしいと願っています」